

職業的進路不決断傾向の測定による大学生のキャリア意識類型化の試み

Classification of Career Consciousness by Measurement of Career Indecision in University Students

粕川 正光・木村 栄宏

Masamitsu KASUKAWA and Hidehiro KIMURA

本研究では、大学生を対象として、就職に向けての進路選択およびキャリア形成に向けた指導という観点から、キャリア意識および進路不決断傾向に関する検討を行い、大学生のもつキャリア意識の類型化を試みるため、大学生に対し、キャリア意識アンケートおよび進路不決断尺度への回答を求めた。クラスター分析によって、進路不決断傾向について5つのタイプが抽出された。5つのタイプは、下位尺度のプロフィールからそれぞれ、高不安タイプ、外的統制タイプ（平均タイプ）、モラトリアムタイプ、相談希求タイプ、決定タイプとして分類された。これらのタイプの特徴は、同時に実施したキャリア意識アンケートの結果からもある程度の妥当性が認められた。これらのタイプによって、学生が必要とするキャリア支援のあり方は異なるため、学生の問題を見極めた上でのきめ細かい支援の重要性が示唆された。

1. 問題と目的

若者にとって、就職は人生最大の転換点であるといえる。それまでの、学生という立場から就職して社会人となることは、社会的ポジションという観点からも、金銭的観点からも非常に大きな変化であり、就職とは、その後の人生を決定する場合もあるほど極めて重大な選択行動である。

近年、こうした大学生の就職への取り組みやキャリア意識の形成において、大きな変化があることが指摘されている。平成15年度の国民生活白書(内閣府, 2003)によれば、大学卒業者は1990年(40万人)から2002年(55万人)にかけてかなりの増加をしている一方で、就職者の人数は1997年の35万人をピークに減少に転じている。また、就職率も同様の低下を見せている。この背景には、経済的な不況による企業就職の難化の要因も大きいと考えられるが、それだけでなく、学生の側の就職に関する考え方の変化も一つの要因として存在すると考えられる。(株)毎日コミュニケーションズが毎年実施している「就職意識調査」によると、「希

望する就職先に決まらなければ、就職しなくともよい」と考える学生は2002年の22.2%をピークに減少を続けてはいるものの、2008年においても約1割にあたる10.1%がそのようなと考えており、そのうちフリーターを進路と考えている学生は18.8%となっている。

また、高校生を対象とした調査ではあるが、日本労働研究機構による「進路決定をめぐる高校生の意識と行動」(2000)によると、1月時点で「パート・アルバイト予定者」(全体の12.0%)である高校3年生に「パート・アルバイトになることを考えた理由」について尋ねたところ、「他にやりたいことがあるから」という「目的追求型」が22.8%と最も多く、将来的な目的を達成するためにパート・アルバイトを選択している学生が多いことが示されている。この調査で、就業意識の違いを予定進路別にみると、「パート・アルバイト予定者」は「1つの仕事にとどまらずいろいろな経験をしたい」とか「自分にあわない仕事ならしたくない」と考える人の割合が他の進路予定者に比べて高く、一方、「安定した職業生活を送りたい」と考える人の割合は他の進路予定者に比べて低く、仕事の安定性についてはあまり考慮に入れていないことが伺える。また、経済的に逼迫しておらず収入動機が弱いことがパート・アルバイト希望者増加の要因となっていると考えられる。このような依存生

活が続いて自意識が低下し、現状のまま自由気ままな生活を送り続けたいと考える若者も多い。このような、仕事の安定性を考慮しない傾向の増加は大学生においても同様に認められる傾向であり、就職率の低下の一因となっていると考えられる。

大学への進学率が平成18年3月の時点で49.3%と過去最高を記録し、大学という高等教育機関においてどのようなことを学び、どのようなスキル・知識を身につけるかということの重要性は増していると考えられる。しかしながら、大学への進学にあたっては、どのような大学、学科を選択し、どのようなことを学びたいかということについて十分な情報収集ができず、結果的に自己の希望や適性に合致した進学ができなかった結果、大学への適応が困難となり、学習意欲の欠如や心理的不適応、留年などの問題が生じる危険性があるとの指摘もなされている(柳井, 椎名, 石井2004)。これらの不適応の問題は、最終的な大学の出口である就職の場面へとつながる問題であり、進路への不適応を起こした学生が適切な就職活動を行うことが難しく、大学の就職率低下の一因となることは、学生側にとっても大学側にとっても重大な問題である。

このような、職業選択上の問題を表すものの一つとして、「進路不決断(Career Indecision)」という概念が検討されてきている(Osipow, Carney & Barak, 1976; 下山, 1986; 清水, 1990; 中嶋・山本, 2007; 永作, 2007)。進路不決断とは、進路選択という決断を行うことができない心理的状態や傾向性を示す概念である。実際の進路指導場面などにおいて、進路意志決定ができないことを訴える者は多く、不決断傾向は今日の青年にとって、非常に重要な問題であると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では千葉科学大学危機管理学部における学生のキャリア意識および進路不決断傾向に関する調査を行った。本学危機管理学部の学生は、危機管理という特殊な専門分野の専攻を行っている大学生であり、一般的な大学生とはその興味傾向やキャリア指向などが異なっていることが指摘されており、学生消防隊などの独特のキャリア支援活動も行われている(木村・室井, 2008)。本研究では、そのような危機管理学部生のキャリア意識についての調査を行い、大学生の進路選択の心理特性の傾向について明らかにするとともに、学生の就職活動やキャリア形成を支援するために、大学がどのように学生を支援すべきかという観点からの考察を試みる。本研究によって、今後の研究のための基礎的データを収集するとともに、大学における進路指導やキャリア教育などの方向性に関して有益な示唆を得ることができると考えられる。

2. 方法

調査対象者

千葉科学大学の大学生115名(2年生44名, 3年生71名)を調査対象とした。大学生が所属する学科は、いずれも危機管理学部危機管理システム学科であった。

調査時期

2007年9月

調査手続き

後期オリエンテーション時に、各学年単位でチューターによって調査用紙を配布し、一斉に実施した。

調査材料

調査は質問紙によって行われ、調査対象者の基本的属性(所属学科, 学年, 性別など)に関する質問のほか、以下に示す2種類の調査を実施した。

1. キャリア意識に関するアンケート

独自に作成した、キャリア意識に関するアンケートを実施した。アンケートは、「はい」または「いいえ」の2件法で回答を求める12項目および自由記述1項目の計13項目より構成された。質問項目は以下の通りである。

- 1) 将来の自分の進路が決まっていますか
- 2) 自己理解や自分の適性について考えたことはありますか
- 3) そのことについて友達と話したことはありますか
- 4) そのことについて両親と話したことがありますか
- 5) そのことについて先生と話したことがありますか
- 6) 仕事や人生や働くことの意義について考えたことはありますか
- 7) そのことについて友達と話したことがありますか
- 8) そのことについて両親と話したことがありますか
- 9) そのことについて先生と話したことがありますか
- 10) 自分に自信をもっていますか
- 11) 大学の授業は役に立っていますか
- 12) 大学の授業は将来役に立つと思いますか
- 13) 自由記述項目として「大学の授業に期待していること」の回答を求めた。

項目1)から12)については、それぞれの項目について、はいを1点、いいえを0点として得点化を行った。

2. 進路不決断尺度

清水(1990)によって作成された、進路不決断尺度を用いた。この尺度は「将来の職業」の側面について8つの下位尺度から構成されており、合計40項目の尺度である。なお、本尺度は中学生を対象として作成された尺度であるが、奥井・大里(2004)によって、本尺度の若年労働者への適用が可能であることが検証されており、萩原・桜井(2008)において大学生への適応を行った研究が実施されている。それらを踏まえ、本研究においても進路不決断尺度の大学生に対する適用をおこなった。進路不決断尺度の下位尺度の構成は以下の通りである。

- 1) 職業決定不安: 「将来の職業をきめることに対して不安がある」ほか4項目

- 2) 職業選択葛藤：「いろいろなことに興味があるので、どの職業を選んだらよいかわからない」ほか4項目
- 3) 職業相談希求：「職業選択の問題は重要なことなのでだれかと相談したい」：ほか4項目
- 4) 職業障害不安：「将来の職業について希望はあるが、それに親が反対するのではないかと心配である」ほか4項目
- 5) 職業外的統制：「就職先の決定は、運や偶然によって決まることが多い」ほか4項目
- 6) 職業情報不足：「自分の興味や関心がよくわからないので将来の職業が決まらない」ほか4項目
- 7) 職業モラトリアム：「いままであまり職業のことを真剣に考えたことがない」ほか4項目
- 8) 職業準備不安：「具体的な将来の職業を考えているが、採用試験が心配である」ほか4項目
- 回答は、「まったくあてはまらない(1)」から「よくあてはまる(5)」までの5段階で求め、得点が高いほど進路不決断の傾向が強くなるよう得点化した。

3. 結果と考察

調査対象者115名の回答について、まず学年ごとに調査結果の基本統計量を算出した。キャリア意識に関するアンケートの結果をTable 1に、進路不決断尺度の結果をTable 2に示す。

キャリア意識アンケートについては、将来の自分の進路が決まっていますかという質問に対し、2年生、3年生ともに約6割前後の学生が「はい」と回答しており、一定数の学生が将来の進路を決定していると回答している一方、約4割の学生が将来の進路を決定していないことが示された。また「～について先生と話したことがありますか」の回答は、両親や友達と比較して全体的に低く、教員が就職に関する相談先とは認知していない傾向が示された。学年間の得点の違いに注目すると、「自己理解や自分の適性について考えたことはありますか」の質問項目および、「仕事や人生や働くことの意義について両親と話したことがありますか」の質問項目において、2年生に比べ3年生において、「はい」と回答する割合が高くなっていた。調査時期は3年生が本格的な就職活動を開始する直前の時期であり、3年秋以降

Table 1 キャリア意識アンケートの学年別平均得点

質問項目	2年	3年	全体
将来の自分の進路が決まっていますか	0.56 (0.50)	0.64 (0.48)	0.61 (0.49)
自己理解や自分の適性について考えたことはありますか	0.64 (0.48)	0.81 (0.39)	0.74 (0.44)
そのことについて友達と話したことはありますか	0.43 (0.50)	0.52 (0.50)	0.49 (0.50)
そのことについて両親と話したことがありますか	0.57 (0.50)	0.57 (0.50)	0.57 (0.50)
そのことについて先生と話したことがありますか	0.14 (0.34)	0.12 (0.32)	0.12 (0.33)
仕事や人生や働くことの意義について考えたことはありますか	0.74 (0.44)	0.86 (0.35)	0.81 (0.39)
そのことについて友達と話したことがありますか	0.45 (0.50)	0.42 (0.49)	0.43 (0.50)
そのことについて両親と話したことがありますか	0.37 (0.48)	0.54 (0.50)	0.47 (0.50)
そのことについて先生と話したことがありますか	0.14 (0.35)	0.07 (0.26)	0.10 (0.30)
自分に自信をもっていますか	0.29 (0.45)	0.26 (0.44)	0.27 (0.45)
大学の授業は役に立っていますか	0.78 (0.42)	0.78 (0.41)	0.78 (0.41)
大学の授業は将来役に立つと思いますか	0.71 (0.45)	0.76 (0.42)	0.75 (0.44)

() 内は標準偏差

Table 2 進路不決断尺度の学年別平均得点

質問項目	2年	3年	全体
1) 職業決定不安	13.64 (4.36)	12.03 (4.61)	12.57 (4.56)
2) 職業選択葛藤	15.88 (4.06)	16.71 (4.15)	16.43 (4.15)
3) 職業相談希求	12.58 (3.46)	12.32 (3.79)	12.41 (3.70)
4) 職業障害不安	13.64 (4.24)	11.77 (3.42)	12.40 (3.83)
5) 職業外的統制	13.42 (4.85)	12.82 (5.17)	13.02 (5.03)
6) 職業情報不足	11.55 (3.37)	9.60 (3.80)	10.26 (3.78)
7) 職業モラトリアム	17.09 (3.70)	17.71 (3.55)	17.50 (3.63)
8) 職業準備不安	13.64 (4.36)	12.03 (4.61)	12.57 (4.56)

() 内は標準偏差

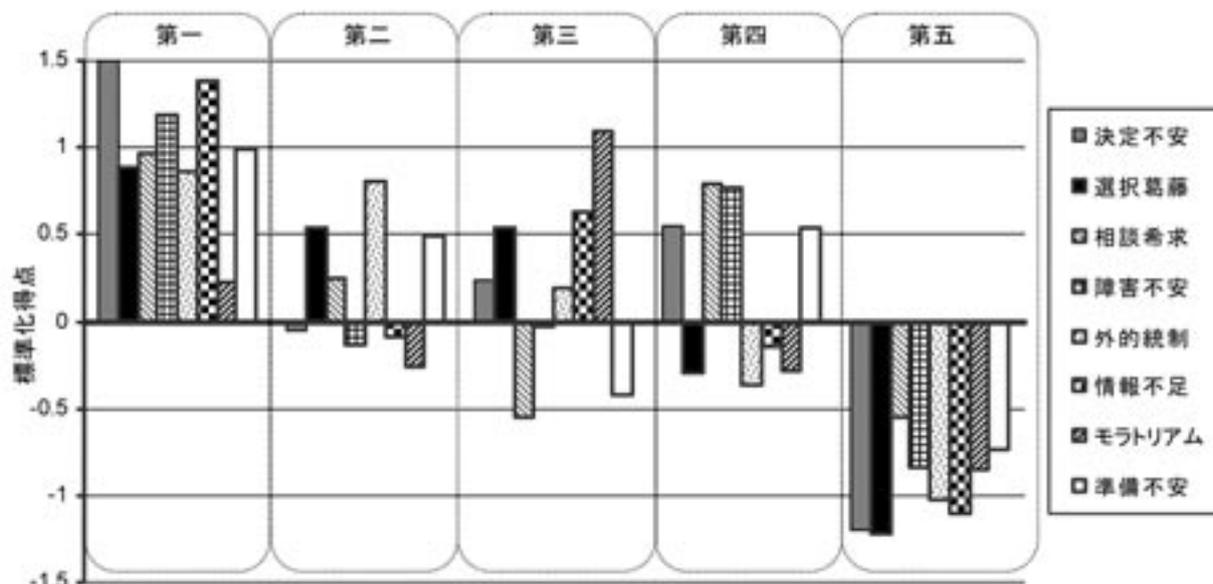


Figure 1 クラスター分析の結果

の就職活動にそなえて自分の適性について考えたり両親との相談を行ったりする学生が増加するのだと考えられる。

進路不決断尺度については、全体的な傾向として職業モラトリアムおよび職業選択葛藤の得点が高い傾向が学年を問わず認められ、職業選択に葛藤しつつも選択を先延ばししたいと考える傾向が認められた。また、学年間の比較を行うと、職業情報不足および職業障害不安などにおいて、相対的に大きな学年間の差が認められるが、全体的に2年と3年のあいだに大きな結果の違いは認められなかった。

次に、永作(2007)の手法を参考に、クラスター分析を用いた進路不決断傾向の分類を行った。進路不決断尺度について8つの下位尺度をそれぞれ標準化し、その値に基づいて、K-means法による非階層的クラスター分析を行った。分析に際し、欠損値の認められたデータを分析対象外としたため、分析対象は98人分のデータとされた。クラスター分析の結果、解釈可能な5つのクラスターが得られた。Figure 1にクラスター分析の結果を示す。

各クラスターごとの下位尺度のパターンからみた5つのクラスターの特徴は次の通りである。

第一クラスター：(高不安タイプ) 職業モラトリアムの値は低いものの、それ以外の尺度得点が総じて高く、特に職業決定不安や職業情報不足、職業障害不安などが相対的に高いグループ。職業を決定したいという気持ちは強いもののそのことにたいする不安が高いタイプ。

第二クラスター：(外的統制タイプ) 全体的には最も平均的であるが、職業外的統制の得点がやや高く、標準的な職業意識をもちながらもその決定が結局は運や偶然などによって決まってしまうという意識を持つ傾向のグループ。

第三クラスター：(モラトリアムタイプ) 職業モラトリアムの得点突出して高く、職業決定を先延ばしにしたいという意識の強いグループ。

第四クラスター：(相談希求タイプ) 職業選択に関する相談希求と障害不安が相対的に高く、モラトリアムはむしろ低い傾向にあるグループ。進路選択に関して誰かに相談したいという傾向の強いグループ。

第五クラスター：(決定タイプ) 総じて値が低く、現時点で全体的にははっきりとした職業決断の目標を持っているグループ。

Table 3に、各クラスターにおける学年ごとの人数および学年内での比率を示す。

クラスター分析の結果から、5タイプの職業決定不安傾向が見いだされた。第一クラスターとして分類された高不安タイプの学生は、就職活動やキャリア形成に関する大学や教員からの支援が最も必要なタイプであるといえるだろう。モラトリアム尺度が相対的に低いことからこのタイプは職業決定を行いたい意欲はあると考えられるが、そのことに対する決定不安や情報不足などを感じているグループであると考えられる。下位尺度のパターンから、このタイプの学生は、大学や教員などの自分以外の他者からの支援

Table 3 各クラスターの学年別人数

クラスター	2年	3年	全体
第一	2 (6%)	9 (14%)	11 (11%)
第二	11 (33%)	10 (15%)	21 (21%)
第三	13 (39%)	13 (20%)	26 (27%)
第四	3 (9%)	12 (18%)	15 (15%)
第五	4 (12%)	21 (32%)	25 (26%)

() 内は学年内の割合

を求めていることが推測できる。このタイプの学生に対し、適切な支援を行い、より安定した職業決定へと導くことは大学における就職支援において、非常に重要であると考えられる。

第二クラスターとして分類された外的統制タイプの学生は、今回の5種類の分類の中では最も平均的な学生であるといえる。外的統制の得点が相対的にやや高い傾向はあるものの多くの下位尺度の得点傾向は平均的であるといえる。外的統制の他、選択葛藤および準備不安の得点がやや高くなっており、一方でモラトリアムの得点が相対的に最も低いことから、就職への意欲はあるが、就職先は最終的に運や偶然によって決定するという意識を持っているグループであると考えられることができる。

第三クラスターとして分類された、モラトリアムタイプの学生は、若者に多く見られるタイプであり。全体的な人数としても、今回の調査で最も数が多いタイプとなっている。モラトリアムの得点が高い一方で、相談希求および準備不足の得点が低くなっており、進路決定を先延ばしにしたいと考えつつ、誰かに相談する必要性や就職準備の不足などを特に感じていない傾向があることが示唆される。このタイプの学生は、就職への進路選択活動が最も鈍いタイプの学生であると考えられる。モラトリアム傾向は若者に一般的に認められる傾向であり、このようなタイプの学生に対して、適切な就職指導を行うことは、社会のみならず大学において重要な検討事項であることは確かであろう。

第四クラスターとして分類された、相談希求タイプの学生は、決定不安、相談希求、障害不安、準備不安が高く、選択葛藤、外部統制、情報不足、モラトリアムが低いという特徴的な下位尺度パターンを持っている。これは、職業に対して、ある程度明確な方向性を持っているものの、それを決断、達成するための不安が高く、誰かに相談したいという希望を持っているタイプであると解釈することがで

きる。この場合、学生自身が目標についてはある程度定めているものの、そのプロセスに関する不安が高いことが示唆される。

第五クラスターとして分類された決定タイプの学生は、総じて下位尺度の得点が低い傾向があり、既に自らの進路についての決断を行っている学生であると考えられることができる。調査を実施した千葉科学大の特性として、他の大学に無い危機管理学を専攻していること、および消防士や救急救命士、警察官などの志望者が多いことなどから考えると、このタイプの学生は入学当初あるいは大学での学びを通して早い段階から自らの進路を決定している学生であると考えられることができる。このタイプの学生は、進路に関する考え方がしっかりしており、目標も明確であることから安定した大学生活が送れていると考えられるが、一方で、一度決めた目標にこだわりを見せ、進路選択に際して自己の学力や適性、社会的状況などを踏まえて、多様な進路を考えることができない、視野が狭い傾向が認められる学生が存在する。その結果、例えば希望する業種への採用や公務員試験の合格などにこだわり、結果的に就職活動に失敗してしまうケースなどが考えられるため、相談希求タイプと同様に、目標に達成のために何が必要であるかを自覚させる指導を行うと同時に、自身の適性や能力などを客観的に判断した上で、多様な視野から進路を検討することの重要性などについての指導が必要であろう。

Table 4に、進路不決断尺度のタイプ別に、キャリア意識アンケートの平均得点を集計した結果を示す。以下、顕著に認められる傾向のみについて考察する。「将来の自分の進路が決まっていますか」の質問に関する得点が、高不安タイプである第一クラスターと、モラトリアムタイプである第三クラスターにおいて顕著に低い傾向が認められた。高不安タイプの学生は、「自分に自信を持っていますか」の質問における得点が低い傾向も認められ、不安が高く自分に

Table 4 クラスター別のキャリア意識アンケート結果

質問項目	第一	第二	第三	第四	第五
将来の自分の進路が決まっていますか	0.27	0.71	0.27	0.80	0.92
自己理解や自分の適性について考えたことはありますか	0.73	0.81	0.69	0.80	0.76
そのことについて友達と話したことはありますか	0.55	0.57	0.46	0.60	0.44
そのことについて両親と話したことがありますか	0.55	0.57	0.46	0.60	0.60
そのことについて先生と話したことがありますか	0.09	0.05	0.19	0.27	0.08
仕事や人生や働くことの意義について考えたことはありますか	0.91	0.90	0.73	0.87	0.84
そのことについて友達と話したことがありますか	0.27	0.62	0.31	0.33	0.60
そのことについて両親と話したことがありますか	0.64	0.52	0.35	0.33	0.68
そのことについて先生と話したことがありますか	0.09	0.14	0.12	0.13	0.04
自分に自信を持っていますか	0.09	0.35	0.27	0.27	0.36
大学の授業は役に立っていますか	0.73	0.80	0.72	0.86	0.80
大学の授業は将来役に立つと思いますか	0.73	0.81	0.60	0.79	0.80
	n=11	n=21	n=26	n=15	n=25

自信が無い傾向が認められた。また、モラトリアムタイプの学生は、「仕事や人生や働くことの意義について考えたことはありますか」の得点が全体的に他のタイプよりもやや低く、進路決定を先延ばしにして仕事についてあまり深く考えていない傾向が認められた。高不安タイプおよびモラトリアムタイプの学生は、相対的にはあるが、大学の授業に関する評価の得点もやや低く、就職などの進路が不明確なままであることが、大学の授業などへの低い評価と関連している可能性が示唆される。大学としても、これらのタイプの学生に対して適切な指導を施すことは、大学の評価を高めるためにも重要であると考えられる。

また、相談希求タイプである第四クラスターにおいて、「自己理解や自分の適性について」他者と話している割合が高いことが認められる。このタイプは「進路決定」に関する得点も高く、クラスター分析に基づく考察が妥当であることがアンケート結果からも示された。

5. 全体的考察

本研究では、大学生を対象として、就職に向けての進路選択およびキャリア形成に向けた指導という観点から、キャリア形成に関する意識および職業的進路不決断傾向に関する検討を行った。その結果、進路不決断傾向について5つのタイプに分類された。5つのタイプは、下位尺度のプロフィールからそれぞれ、高不安タイプ、外的統制タイプ（平均タイプ）、モラトリアムタイプ、相談希求タイプ、決定タイプと解釈された。これらのタイプの特徴は、同時に実施したキャリア意識アンケートの結果からもある程度の妥当性が認められた。

これらの結果を大学におけるキャリア形成支援という観点から概観すると、最も重要な点は、それぞれのタイプによって必要とされる支援内容は異なるという点である。高不安タイプや相談希求タイプのような、積極的な支援を求めているタイプもあれば、モラトリアムタイプや決定タイプのように、第三者による支援を余り求めないタイプもある。それぞれのタイプにおいては最適な支援方法が異なってくることは明かである。

高不安タイプの学生や相談希求タイプの学生については、学生自身が積極的な支援を希望していると考えられる。したがって、大学側としても積極的な支援を行うことが重要である。高不安タイプは、情報不足や相談希求の得点が高く、明確に進路が決定しておらず、自分に自信が無いため不安が高いタイプであると考えられる。このような学生に対しては、積極的な情報提供を行うなど、個別に丁寧なサポートを行うことで不安低減を図ることが職業指導上有効であると考えられる。相談希求タイプも相談ニーズの高いタイプではあるが、高不安タイプと比較するとある程度目標は明確なのだが、そのプロセスに不安があるタイプであると考えられるため、目標に向かうためにどのようなプロ

セスが必要であるかを自分自身が自覚し、自身の能力や適性などを客観的に判断した上で進路決定をするための就職指導が必要であると考えられる。

モラトリアムタイプの学生に対する支援も極めて重要である。モラトリアムタイプは、将来について考えることに抵抗を感じ、進路決定を先延ばしにしたいという意識が強く、積極的なキャリア形成行動を取らないケースが多いと考えられる。このような学生に対しては、行動に対する動機付けを高めるための働きかけが重要になってくる。Deci & Ryan (2002)の動機付け理論では、自律な動機付けを高めるための要因として、有能さ、自律性、関係性の3つが挙げられ、それらをサポートすることが重要であるとされている。モラトリアムタイプの学生に対しては、これらの観念に配慮しながら、将来について考えたくないという考えを受容しつつも主体的な進路選択行動の遂行に自信が持てるようになることができるような支援を行い、進路選択への動機付けを高めて行くことが重要であると考えられる。

外部統制タイプや決断タイプの学生は、比較的安定したタイプであり、自己の進路に対する不安も比較的低い。これらのタイプの学生については、極端な介入の必要性は薄いかもしれないが、職業内容に関するより深い理解を促すことや、就職後にどのように経験を積んでいくかで意識させるなど、就職後のキャリア形成につなげる形での支援が考えられる。また、希望が明確な分だけ就職活動の極端な絞り込みを行ったりするケースや、希望が上手く行かない場合の挫折が大きいなどのパターンが考えられるため、その点に注意を払う必要がある。

ただし、本研究で論じたような学生の類型化を行う上で注意せねばならないこととして、過度な類型化によって画一化した対応をおこなう危険性が指摘されている(Savickas & Jarjoura, 1991)。学生などを類型化してとらえることは、支援方法の有効性を類型ごとに検討する上で有効である一方で、ステレオタイプ化された対応に陥ってしまいがちである。重要なことは、支援を行う者が目の前にいる学生が抱えている問題をしっかりと見定めて個別のケースに適した支援を行うということであり、学生を支援する上でもっとも基本的な姿勢として非常に重要なことであることを忘れてはならないだろう。

6. 今後の課題

本研究の結果は、進路不決断という観点を中心としたものであるが、近年においては学生の自己効力感や動機付けという観点から大学生のキャリア形成を検討しようとする試みが多くなされてきている(安達, 2001b; 廣瀬, 1998; 浦上, 1996など)。自己効力感とは、ある課題を遂行できる可能性に対する自分自身の判断のことであり、進路不決断は、進路選択に対する自己効力感との関連が大きいことが示されている。(eg. Taylor & Betz, 1983) これらの観点から

の検討を進めることが今後の課題の一つであると考えられる。

また、学業成績との関連の問題も考えられる。鈴木、椎名、石塚、柳井(1997)は、進路への意識を形成する上で学業成績が強く影響を及ぼすことを示している。学業成績の評価は大学生においては高校生までほど厳しくは無いが、就職活動にあたって学業成績を強く意識する大学生は少なからず存在することも事実であり、そのような成績への不安が進路選択行動に及ぼす可能性は十分に考えられる。実際の学業成績と進路不安などの間の関係について、今後さらなる検討の余地があると考えられる。

本研究の結果は、一大学の一学科における学生のみを対象としており、もとより大学生の一般的傾向といえるものではない。安達(2001a)は、大学やそこにおける専攻といった教育的背景は、キャリア発達過程に対し直接的にも間接的にも影響を及ぼす変数となっていることを指摘している。危機管理学専攻という独特の教育的背景がどのような要因として学生に影響を及ぼしているかを明らかにするために、他の学部や大学などにおける同様の調査との比較を行うことは今後の課題の一つであろう。

大学生のキャリア形成支援の問題は、今日では非常に重要な課題であり、大学生のキャリア形成のあり方とそのため有効な支援方法を模索するために、今後も様々な角度から研究を実施することが大切であろう。

引用文献

- 安達智子 2001a 大学生の進路発達過程—社会・認知的進路理論からの検討— 教育心理学研究, **49**, 326-336.
- 安達智子 2001b 進路選択に対する効力感と就業動機, 職業未決定の関連について—女子短大生を対象とした検討— 心理学研究, **72**, 10-18.
- Deci, E.L. & Ryan, R.M 2002 *Handbook on Self-Determination Research*. Ner York: University of Rochester Press.
- 萩原俊彦・櫻井茂男 2008 “やりたいこと探し”の動機における自己決定性の検討：進路不決断に及ぼす影響の観点から 教育心理学研究, **56**, 1-13.
- 廣瀬英子 1998 進路に関する自己効力研究の発展と課題 教育心理学研究, **46**, 343-355.
- 木村栄宏・室井房治 2008 消防・救急教育を通して培うキャリアデザイン支援の実践, キャリアデザイン研究, **4**, 121-129.
- 内閣府(編) 2003 平成15年版国民生活白書—デフレと生活—若年フリーターの現在 ぎょうせい
- 永作稔 2007 高校生の進路不決断類型化の試み 日本教育

- 心理学会総会発表論文集, **49**, 539.
- 中嶋渥・山本眞利子 2007 「就職後の自分」を用いたロールレタリングが大学生の進路不決断と自尊感情に及ぼす影響 久留米大学心理学研究, **6**, 75-79.
- 日本労働研究機構 2000 進路決定をめぐる高校生の意識と行動—高卒「フリーター」増加の実態と背景— JIL調査研究報告書No. 138
- 奥井秀樹・大里大助 2004 若年労働者の職業的進路不決断の測定 進路指導研究, **22**, 19-24.
- Osipow, S.H, Carney, C.G. & Barak, A. 1976 A scale of educational-vocational undecidedness: A typological approach. *Journal of Vocational Behavior*, **9**, 233-243.
- Savickas, M.L. & Jarjoura, D. 1991 The Career Decision Scale as a type indicator. *Journal of Counseling Psychology*, **38**, 85-90.
- 清水和秋 1990 進路不決断尺度の構成—中学生について— 関西大学社会学部紀要, **22**, 63-81.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20-30.
- 鈴木規夫, 椎名久美子, 石塚智一, 柳井晴夫 1997 高校生の進路選択に関わる要因分析 大学入試センター研究紀要, **26**, 1-27.
- Taylor, K.M. & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63-81.
- 浦上昌則 1996 女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から— 教育心理学研究, **44**, 195-203.
- 柳井晴夫, 椎名久美子, 石井秀宗 2004 大学生の学習意欲に関する調査研究—国公立私立大学学生3万人の調査結果について— 大学入試研究ジャーナル, **14**, 1-12.